

第117回 定期演奏会

## PROGRAM

ブルックナー:交響曲 第8番 ハ短調 [ハース版] (約90分)*Anton Bruckner: Symphony No. 8 in C minor*

第1楽章 アレグロ・モデラート

*Allegro moderato*

第2楽章 スケルツォ:アレグロ・モデラート トリオ:ゆっくりと

*Scherzo: Allegro moderato - Trio: Langsam*

第3楽章 アダージョ:荘厳にゆっくりと、しかし引きずらないように

*Adagio. Feierlich langsam, doch nicht schleppend*

第4楽章 フィナーレ:荘厳に、速すぎないように

*Finale: Feierlich, nicht schnell*

※ 使用楽譜につきまして、当初チラシなどで[初稿/1887年ノヴァーク版]と記載しておりましたが、佐渡芸監督の意向により[ハース版]に変更となりました。予めご了承くださいませようお願い申し上げます。

指揮・芸術監督: 佐渡 裕 *Yutaka Sado, Conductor & Artistic Director*管 弦 楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2019 **9/13(金)・14(土)・15(日)** 3:00PM開演  
 兵庫県立芸術文化センター **KOBELCO** 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金  
 (舞台芸術創造活動活性化事業)  
 独立行政法人 日本芸術文化振興会



これさえ見ればわかる!

## 今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論)

## ブルックナーの最高傑作、交響曲第8番

6月定期の「交響曲第5番」に続き、今月は彼の作品の最高峰と謳われる「第8番」を聴く。演奏時間が長いのはブルックナーのお家芸だが、この「8番」は前回の「5番」よりもさらに長く、平均1時間30分を要する。

平均——という意味は、同じスコアを使用していても、指揮者によるテンポの違いにより、演奏時間もさまざまになるからである。往年の巨匠チェリビダッケのような遅いテンポを採る指揮者は、これを1時間40分もかけてゆっくりと演奏した。一方、往年のオランダの巨匠ベイヌムは、速いテンポで飛ばし、なんと1時間13分で演奏していた(指揮者が採るテンポには、こんなにも差がある!)。だが、これらはいずれも、極端な例だ。

長ければ長いなりに、この曲の雄渾壮大さは、ずば抜けている。アルプスの連峰を想像させる壮大さ、深山の湖の畔に佇むような、神秘的な静寂感——。ブルックナーの得意の手法が、最高の形で発揮された大交響曲が、この「8番」なのである。

## 必聴POINT

ライター  
おすすめ!!

## 《悠然たる第1楽章、主題反復で押す第2楽章》

第1楽章では、神秘的な開始から壮大に轟く昂揚へ進む起伏が聴きもの。続く第2楽章では、主題の音型が楽器編成を替えつつ、数え切れぬほど反復されていく「繰り返しの恍惚」が面白い。

## 《第3楽章のアダージョ(注1)はブルックナーの真髓》

「ブルックナーのアダージョ」といえば、音楽史上のキーワードになるほどの有名な存在だ。ゆっくりとした息の長い主題が続く。その深遠で荘重で、神秘的な静寂に満ちた美しさは、彼の「アダージョ」の中でも最高傑作として讃えられる。

## 《長い終楽章も壮大無比な起伏》

雄大なスケール感にあふれる。劇的な第1主題(冒頭)と、やや落ち着いた第2主題との対比。長い旅の結核は、深淵から高みへ昇るクレッシェンドに導かれ、各楽章の主要主題が同時にごうごうと響きあう圧倒的な頂点である。

(注1)アダージョ:極めて遅いテンポを示す速度用語。ラルゴよりは少し速い。

# PROGRAM NOTE

曲目解説 —  
演奏をより深く楽しむために  
東条 碩夫(音楽評論)



## ブルックナー:交響曲 第8番 ハ短調(ハース版)

初演:1892年12月18日 ウィーン(第2稿による)

### 晩年に得た名声

ブルックナーは、オルガン演奏家としての名声は早くから得ていたものの、交響曲作家としては、世になかなか理解されなかった

1877年12月16日、彼が自らウィーン・フィルを指揮して「第3交響曲」を初演した時には——指揮技術の拙さもあったのだが——客は途中でどンドン帰りはじめ、曲が終った時にはわずかに十数人しか残っていないという状態で、ブルックナーは涙を浮かべて楽屋に座り込んだ、という。ウィーンの有名な批評家ハンスリックは口を極めて彼の交響曲をこき下ろし、ブラームスさえもが彼の音楽を理解できず、その長さゆえに「交響曲の大蛇」と揶揄したことがある(そう言ったのはハンスリックだったという説もある)。ただし、ブラームスとブルックナーは、互いに人間としては深い尊敬の念をいだいていたと伝えられる。

そのようなブルックナーにも、やっと成功が訪れる。1884年12月30日、ライプツィヒでアルトゥール・ニキシュが指揮して初演した「第7交響曲」は、ブルックナーにとっては画期的な大成功になった。翌1885年3月10日にヘルマン・レヴィがミュンヘンで同曲を指揮した時には、それ以上のセンセーションを巻き起こした。だが、その頃ブルックナーは、もう60歳代に入っていたのである。

かんじんの、彼自身が居住しているウィーンでは、ハンスリックが睨みを利かせていたために、なかなか芽が出なかったが——もともと、ブルックナーの方が、彼を恐れるあまり自作の演

奏を自ら断ってしまった、という事実もあったのだが——それでも1886年3月21日に「7番」がやっと「ウィーン初演」されてからは、ハンスリックの酷評にもかかわらず、次第に光が見えはじめた。同年7月には、オーストリアのフランツ・ヨーゼフ皇帝から騎士十字章を授与され、また1891年7月にはウィーン大学から名誉博士の称号を贈られた。

そしてついに、1892年12月18日、ハンス・リヒターの指揮によりウィーンで初演されたこの「第8交響曲」は圧倒的な成功を収め、ブルックナーは、ようやくウィーンでも不動の名声をかち得たのであった。さしものハンスリックも、「騒然たる喝采、打ち振られるハンカチ、数え切れぬほどのアンコール、月桂冠など……この演奏会が大成功だったことは疑いない」(注2)と皮肉気には書かなければならなかったのである。

### 円熟の極み、ブルックナーの壮大な管弦楽の魅力

**第1楽章** ヴァイオリン群のトレモロ(注3)と、ホルンの長く引き延ばされた神秘的な響きによる開始は、ブルックナーの得意とした手法だ。その中に低音弦楽器で始まる第1主題は、楽章全体にわたり重要な役割を果たす。ホルン8本による分厚い和声をはじめ、オルガン演奏に秀でていたブルックナーの管弦楽法が、巨大にそびえ立つ音楽を形成する。大きな起伏を重ねたあとには、謎めいた、消え入るような終結。

**第2楽章** 冷たい風が吹き入るような導入に続き、スケルツォ(諧謔的)主題が始まるが、これは驚くほど何度も繰り返され、一種の法悦感に聴き手を引き込む(ベートーヴェンの「田園交響曲」第1楽章にもこの手法が使われている)。中間部(トリオ)には、初めてハーブが加わる。

**第3楽章** 緩徐楽章の傑作。冒頭の弦楽器のリズムは、ブルックナーが敬愛したワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」の第2幕の「愛の二重唱」でのそれを思い起こさせるだろう。静寂の世界を感じさせる弱音の美しさ、ハーブも加わった和声の清澄さ、ワーグナー・チューバ(注4)の和声の荘重さなど、魅力は枚挙に暇がない。シンバルも参加した全管弦楽による最後の高潮のあとに続くのは、ホルンとワーグナー・チューバ、弦楽器群による、彼岸への憧れのような終結である。

**第4楽章** 豪壮雄大、激烈な第1主題の迫力は凄まじい。そのリズムが遠のくと、全く様相を変えた第2主題が始まる。

**第5楽章** 壮大な起伏が続くうちに進んだ終結近く、第1楽章第1主題が最強奏で出現すると、曲はいったんおさまり、やがてゆっくりと世界の高みに昇って行くようなクレッシェンドを経て、4つの楽章それぞれの重要主題がいっぺんに高鳴るクライマックスに達する。まさにアルプスの高峰を連想させる巨大な音楽である。

## 初稿版、第2稿各版のこと

ややこしい話ながら、ご参考までに――。

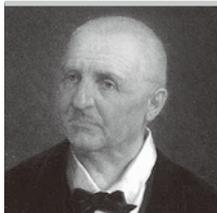
ブルックナーは、すでに「完成」した交響曲をも、あとから補筆改訂することがしばしばあった。この「第8交響曲」も、その例の一つだ。「初稿」は、1884～87年に作曲され、第2稿は1889～90年に書かれたのだが、この初稿と第2稿の間には、極めて大きな違いがある。

初稿では、例えば第1楽章の最後に、最強奏による劇的な終結部が付け加えられていた。また、第2楽章のトリオは、全く異なる曲になっていた。そしてその他、長い全曲の至るところに、楽器編成や、旋律線や、曲の進行の形などにおいて、第2稿と異なるものが聞かれるのだ。

この「初稿版」も出版(所謂「1887年初稿ノヴァーク版」)されていて、時に演奏されることがある。それを聴くと、音楽のつくりも荒っぽく、流れも雑然としていて、ブルックナーがそれを改訂したことがいかに正しかったか、またその改訂がいかに巧みで、作品に高貴な壮大さが備わるようになったかが解るだろう。ただ、その初稿版の素朴さに、「ダイヤの原石」的な面白さと魅力を感じる人も多いのである。

一方、その「第2稿」にも、所謂「ハース版」と「ノヴァーク版」の2種があるので、甚だややこしい。だがそれは、ブルックナー・マニアにとっては重要な問題で、それぞれにファンがついているのだ。

広く演奏されるのは、オーストリアの音楽学者レオポルト・ノヴァークが校訂し、1955年に出版した楽譜(「1889/90年ノヴァーク版」)なのだが、しかし――。



### 作曲家プロフィール

アントン・ブルックナー (1824-1896)

Anton Bruckner

## 今日演奏されるのは「ハース版」のほう

いっぽう、同じく音楽学者ロベルト・ハースが校訂し、1935年に出版した「ハース版」も、人気がある。

ノヴァーク版との最大の違いは、第3楽章の終り近くと、第4楽章の中ほどに、ブルックナーが初稿に書き込みながら第2稿では削除してしまった、少し長い小節数の部分を、復活させていることにある。

それは――第3楽章では、ティンパニを加えた全管弦楽が轟然と大音響で爆発したあとに、すぐにピアノシモに変わって美しく歌われる全10小節からなる部分である。また第4楽章では、開始後6～7分のあたり、全管弦楽が堂々と行進曲調で進んだあとに挿入された、クラリネットとフルートが相次いで下行する、20小節からなる部分を指す。

これら「ハース版」で復活されている2カ所の音楽は、実に美しい。この版が、根強いファンを集めている所以は、ここにある。

**(注2)** デルンベルク著「ブルックナー その生涯と作品」和田旦訳、白水社刊

**(注3)** トレモロ:ここでは弦楽器が急速に弓を上下させ、小刻みな音を出す奏法。

**(注4)** ワーグナー・チューバ:リヒャルト・ワーグナーが考案した、ホルンとチューバの混合のような楽器。ホルン・チューバ、テノール・チューバともいう。

### 楽器編成

フルート3、オーボエ3、クラリネット3、バスーン3(コントラ・バスーン持替)、ホルン8(ワーグナー・チューバ持替4)、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、ハープ3、弦楽5部

オーストリアのアンスフェルデンに生れ、ウィーンで世を去った後期ロマン派の大作曲家。交響曲作家としても音楽史上屈指の存在で、「第0番」を含め番号付のものを10曲(最後の「第9番」は第3楽章までしか完成されなかった)と、初期の「へ短調」1曲を残しているが、「第1番」から「第9番」にいたる9曲は、演奏機会が極めて多い。内気で素朴な性格の持主で、その好人物ぶりを伝えるエピソードも数多く伝わっている。墓はリンツ近くの聖フローリアン教会にある。